

山宮御神幸道を歩く

1 コース概観

山宮御神幸

山宮御神幸というのは、浅間の神が里宮と山宮を往来することの神事で、その道は、『浅間神社の歴史』（富士山本宮浅間大社編）によると、未の刻(午後2時)に本宮で神事が始まり、神のよりつく銚を「木之行事」という役職の人が左肩に載せ、途中肩を替えることなく山宮へ向かった。山宮まで何回か休むので、銚は御休石の上に敷柴(榊)をして、その上に安置した。今、浅間大社楼門前と山宮浅間神社参道に残る銚立石が御休石である。山宮に着くと神事が行われ、その夜丑の刻(午前2時)に還幸となった。「深更なれど燈火を用いず」とあるので、暗い夜道を還ったのであった。山宮御神幸は、明治6年まで4月と11月の初申の例大祭の前日、未の日に行われていたが、以後は行われていない。

御神幸道と丁目石

御神幸道は、湧玉池の畔に「自当社山宮御神幸道五十丁証碑首也」と刻まれた石碑がある。これは、浅間大社から山宮浅間神社に至る道筋に、一丁目(約109m)毎に建てられた標石の首標である。この首標より神田川の石橋を渡り、左折して登山道を北に向かい、渋沢手前の細道を東に向かうと馬車道との交差点に「神幸道三丁目」の標石が立っている。このような丁目石をたどれば、浅間大社と山宮浅間神社を結ぶ昔の道、御神幸道を知ることができる。

しかし、現在では御神幸道に沿って三丁目の標石と、山宮に入ってすぐの四十二丁目と、通称三角屋交差点の西側の沢の右岸沿いに、山宮浅間神社に向って四十六・四十七・四十九丁目の標石が残されているのみである。他には、元の場所から移動させられた標石が、矢立町に十四丁目・四十丁目・山宮の蒲沢に四十丁目が確認されている。

御神幸道の順路

御神幸道の順路を知る資料である『大宮町誌』と『浅間神社の歴史』によれば、「社殿から出御し楼門を出て御休石(楼門前の銚立石)の上に着御する。そこより馬場を東へ進み、馬場の石垣の尽きる所で左折し、小川に架かる行事橋という小石橋を渡る。次に右折して神田川に架かる神幸橋という屋形橋を渡る。そこを左折して、福石神社北裏の御旅所の森(木の本五大堂)の御休殿を出る。そこより斜めに小坂を上り、別当村の南端で右折して東に向かい、渋沢を渡って地藏橋より若之宮に通ずる里道を横ぎり村山道に出る。そこにかくれの森の御旅所(藤の木御休所)があり、そこから北に向かい万野原の南境に舞々木の御旅所がある。次に宮原の御旅所、次に一本櫛の御旅所を経て山宮御迎坂にいたり、山宮着御となる。」

この順路のそれぞれの間の距離については、『山宮御神幸路間數覺』（四和尚宮崎氏文書）に「木の本より藤の木マデ六丁八間、藤の木より御帰休マデ六丁廿四間、御帰休より舞々木マデ拾丁、舞々木より宮原御休マデ貳拾間(丁か)、宮原御休より壹本くぬぎマデ拾貳丁、壹本くぬぎより御向(迎)坂マデ四丁四拾六間、御向坂より御前マデ四丁貳拾四間。」とある。これによれば、木の本五大堂の御旅所から藤の木御休所まで六丁廿四間(約697m)、藤の木御休所から舞々木まで拾丁(約1090m)、舞々木から宮原御休まで貳拾丁(約2180m)、宮原御休から壹本くぬぎ(一本櫛)まで拾貳丁(約1308m)、壹本くぬぎから御迎坂まで四丁四拾六間(約519m)、御迎坂から御前まで四丁貳拾四間(約479m)となる。

この順路と丁目石を手がかりに御神幸道をたどると、浅間大社を出て神田川を渡り、福石神社(輪くぐり神社)の北側から斜めに上り、富士宮信用金庫本部の南側に出て、神田山神社の辺りで地藏橋から若之宮浅間神社へ登る道を横切り、阿幸地へ出る。そこより、村山道(旧登山道)を舞々木へ上り「右富士山道」の道しるべを左に進み、現登山道のマムスバリュ富士宮万野店辺りが出る。そこからは、現登山道に沿ってその西側を上っていく。山宮に入ってすぐ現登山道の石川米穀店の北側の道を入った所に四十二丁目の標石がある。この標石のある所は、明治23年の地図によると粟倉へ出る道筋で山宮方面に向う道沿いにあり、この地点が確実に四十二丁目であったかは判然としない。御神幸道は現登山道の西側沿いに上り、山宮浅間神社に達している。

2 コース紹介

① 鉾立石

鉾立石は浅間大社楼門前の石段上にある自然石で、「山宮御神幸」の祭神は鉾によりついて往復したとされ、今も浅間大社と山宮浅間神社に残されている。

② 御神幸道首標の碑

湧玉池の畔に「自当社山宮御神幸道五十丁証碑首也」と刻まれた石碑があり、これは富士宮浅間神社から山宮浅間神社に至る道筋に、一丁(約 109m)毎に立てられた標石の首標である。

③ 御神幸道三丁目の碑

この丁目石には四角柱に「神幸道三丁目」と記されている。ここは浅間大社から三丁目に当たる。

藤の木御休所 (かくれの森の御旅所)

『大宮町誌』や『浅間神社の歴史』に出てくるかくれの森(藤の木御休所)というのは、判然としないが現在も残される「藤の木」という小字名から推定すると、国道 139 号線(バイパス)より概ね南側の若の宮町と阿幸地町にまたがる範囲で、その中心部には富士宮郵便局がある。郵便局の南にある阿幸地西山の神も含まれている。

④ 舞々木の「富士山道」道標

登山道と御神幸道の分岐点にある。正面に「右富士山道」、裏面に「寛政元己酉年林鐘日」(1789)とある。造立者は「大宮町寺田左衛門 樋口茂口 須藤鐘右衛門」とある。

⑤ 腰掛石・庚申法界供養塔

ここには、道に面して腰掛石と呼ばれる自然石の載る座石と庚申法界供養塔と刻まれた石碑が、二体の馬頭観音とともにある。地元では元々の登山道はすぐ東側であったと伝えている。

⑥ 四十六丁目石

⑦ 四十七丁目石

⑧ 市内最古の道祖神

新屋敷集落の道祖神で、双体像が刻まれている。元禄 2 年(1689)の造立であり、年号の分かる道祖神としては市内最古のものだが、現在は年号銘の部分が剥離していて判読できない。

⑨ 四十九丁目石

⑩ 山宮浅間神社

富士山の噴火記録を見ると、天応元年(781)から長保元年(999)にかけての 200 年間は度々噴火を繰り返していた。特に平安時代の延暦 19 年(800)と貞観 6 年(864)には大噴火を起こしており、古代の人々は火を噴く山の不思議な力をおそれ敬い、富士山そのものを神として祀った。朝廷は富士山の神に位を与え、使者を派遣して拝ませた。そのように富士山を拝んだ場所が山宮浅間神社ではないかと考えられている。山宮浅間神社には本殿がなく、遠くから富士山を拝む遥拝所となっている。富士山本宮浅間大社の社伝によると、古くは「山足の地」に浅間大神を祀っていたとされ、大同元年(806)に征夷大將軍坂上田村麻呂が「山宮」の地から「大宮」の地に移したという。年代の信憑性はともかく、古くは富士山を御神体として山の上の方で祀り、後に麓に下りて現在地に祀られたと社伝は伝えている。

山宮浅間神社は、他の神社であれば本殿が建っている場所に石が並んでいるだけで建物はない。これには次のような話がある。「昔々、村人たちが本殿を造ろうと思い、棟上式までこぎつけると、大風が起こって建物が吹き倒されてしまった。村人たちは幾度も本殿を造り始めるが、本殿はまた吹き倒されてしまい、今度は村人たちの家も被害を受けてしまった。そういうことで、山宮浅間神社に本殿を造ると風の神の祟りがあるので本殿を造ってはいけないというようになった。」山宮浅間神社に本殿がなく遥拝所となっているのは、こうした伝説に託して昔の人々が古い信仰の形を伝えてきたためとも考えられる。